［研究ノート］

アンドレス・ベリョ『カスティーリャ語文法』日本語訳(4)

土　屋　　亮

Translation in Japanese of Andrés Bello's *Gramática de la lengua castellana*: Part 4

Ryo Tsuchiya

Abstract

The author has published three articles in the past in which he worked to translate select chapters and paragraphs of the *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos*（*Grammar of the Castilian language for the Americans*[*] *use*）written by Andrés Bello（1781–1865）, into Japanese. This article is the fourth working title of this series. Bello, who is often referred to as the Venezuelan giant of Humanities, had an admirable career as a philosopher, educator, poet, politician, and linguist, and wrote the *Gramática* in 1847. This exemplary work of Bello is considered to be the predecessor to Chomsky's Generative Grammar and is full of insight that is invaluable to the field of Castilian, i.e., Spanish linguistics. This philological value that it brings to the discipline is what has moved the author to translate it into Japanese—something which has not been carried out by any other philologists.

In this article, the text covered from "Chapter 3: Classification of Words" to the 121st Paragraph on "Chapter 4: Nouns" has been translated into Japanese with annotations. The three prior articles that the author wrote can be found on the journal *Iberia*. For its details please get access to https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000009188991-00.

[*]"Americans" here means "people from the Americas（American Continents）" not "people from the U.S.".

序

本稿は、19 世紀に活躍したベネズエラ生まれの人文学者、アンドレス・ベリョ（Andrés Bello 1781-1865）が 1847 年に著した *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos*（『アメリカ大陸の人々の使用に向けたカスティーリャ語文法』、以下『カスティーリャ語文法』）を日本語に訳出していく試みである。カスティーリャ語（スペイン語）の文法学における研究は、彼の業績のほんの一部に過ぎないが、19 世紀半ばにあってチョムスキーの生成文法を先取していたとも評価される（Cartagena 2014）この『カスティーリャ語文法』を日本語にするのは、意義のあることである。さて、この日本語訳の第 4 稿目となった本稿は、原著の「第 3 章　語の分類」から「第 4 章　名詞」の 121 節までを訳出する。なお、我々が拠っている『カスティーリャ語文法』の版に関する情報、主要参考文献は拙訳(1)を参照されたい。また、本文中においてこの括弧［　］に含まれている語句は、それが読者の理解の一助になると考え、訳者が補ったものである。

第 3 章　語の分類：基礎語と派生語、単純語と複合語

86. あまた存在する語の中でも、*hombre*（男）、*árbol*（木）、*virtud*（徳）のように、我々の言語［すなわちカスティーリャ語］の他の語から派生したのではない単語は、基礎語（[palabras] primitivas）と呼ばれる。

87. その一方、派生語と呼ばれる類があり、よく行われるように、語尾を変えるか、あるいは同じ語尾を保持したまま、しかし、常に何らかの新しい観念を付け加え、カスティーリャ語の他の語から形成された語がそのように呼ばれる[1)]。こうして、実詞 *arboleda*（木立）は *árbol* から派生する。また、実詞 *hermosura*（美しさ）は形容詞 *hermoso*（美しい）から、実詞 *enseñanza*（教育）は動詞 *enseño*[2)]（教える）から、形容詞 *valeroso*（勇敢な）は実詞 *valor*（勇気）から派生している。さらに、形容詞 *amarillento*（黄

色っぽい）は同じく形容詞の *amarillo*（黄色の）から、形容詞 *imaginable*（想像できる）は動詞 *imagino*（想像する）から、形容詞 *tardío*（遅れた）は副詞 *tarde*（遅く）から、動詞 *imagino* は実詞 *imagen*（像・イメージ）から派生し、動詞 *hermoseo*（きれいにする）は形容詞 *hermoso* から、動詞 *pisoteo*（踏みつける）はやはり動詞の *piso*（床・靴底）から、動詞 *acerco*（近づける）は副詞 *cerca*（近くに）から、形容詞 *contrario*（反対の）は前置詞 *contra*（～に対して）から、副詞 *lejos*（遠くに）は複数形の形容詞 *lejos*（遠い）および *lejas* から[3)]、副詞の *mañana*（明日）は実詞の *mañana*（朝）から派生し、他にも例がある。

88. どのような派生であっても、屈折ないし語尾変化と、その語尾変化の支えとなる語根は区別されなければならない。この考えに従えば、たとえば *naturalidad*（自然さ）、*vanidad*（虚栄）、*verbosidad*（言葉のくどさ）において、語尾は -idad であり、これが語根である *natural-*、*van-*、*verbos-* に付加されている。そして、これらはそれぞれ形容詞の *natural*（自然の）、*vano*（虚しい）、*verboso*（言葉数の多い）から取られている。語根そのものからなる語は、たとえそれ自身が他の語から派生したものであろうと、その語根から派生してできる語に対して、基語と呼ばれる。

89. 語の中でも、その構造に二語以上の語が含まれないものは単純語と呼ばれ、そのそれぞれは我々の言語において、たとえば *virtud* や *arboleda* のように、個別に用いることができる。

90. 反対に、それぞれ個別に用いられる二語以上の語が含まれるものは複合語と呼ばれる。たとえ、そこに関与する語のうちの一部ないし全ての形態が変化しても、または、そのいずれもが変化しなくても、である。たとえば、実詞の *tornaboda*（結婚式翌日の宴）は動詞の *tornar*（戻す）と実詞 *boda*（結婚式）から、実詞 *vaivén*（往来）は動詞 *va*（行く）、接続詞 *y*（そ

して)、そしてもう一つの動詞 *viene*（来る）からできている。形容詞 *pelirrubio*（金髪の）は実詞 *pelo*（髪の毛）と形容詞 *rubio*（金色の）から（ただし、この複合語においては *rubio* おける語頭の /r/ 音を維持するために -rr- と書かれる)、形容詞 *alicorto*（羽の短い）は実詞 *ala*（羽）と形容詞 *corto*（短い）から、動詞 *bendigo*（祝福する）は副詞 *bien*（良く）と動詞 *digo*（言う）から、動詞 *sobrepongo*（重ねる）は前置詞 *sobre*（上に）と動詞 *pongo*（置く）からなる。また、副詞の *buenamente*（良く)、*malamente*（悪く)、*doctamente*（博学に)、*torpemente*（愚鈍に）は、それぞれ形容詞の *buena*（良い)、*mala*（悪い)、*docta*（博学な)、*torpe*（愚鈍な）と、このような複合語においては様態や方法（manera o forma）を意味する実詞 *mente*[4)]（心・精神）とからなる。

91. 前置詞である *a*、*ante*、*con*、*contra*、*de*、*en*、*entre*、*para*、*por*、*sin*、*so*、*sobre*、*tras* も多くの語の形成に参与する。たとえば、動詞 *amontono*（山積みにする）は、前置詞の *a* と実詞の *montón*（山状に盛ったもの）からなる複合語である。ほかにも、動詞 *anteveo* は前置詞 *ante* と動詞 *veo*（見る）から、実詞 *sochantre* は前置詞 *so* と実詞 *chantre*（教会合唱の指揮）から、動詞 *contradigo* は前置詞 *contra* と動詞 *digo*（言う）からなるといったぐあいである。

92. これらの前置詞は分離可能複合辞（partículas compositivas separables）と呼ばれる。というのも、これらの前置詞は、これから述べるいくつかの語とは異なり、独立した語としても用いられるからである。そして、これらの語に続く語は、それから作られる複合語と比較して、基語ないし単純語と呼ばれる。したがって、*montón* と *veo* はそれぞれ *amontono* と *anteveo* の基語ないし単純語である。

93. 複合要素が我々の言語に属する単語のほかに、構成要素の一部または

全てが、カスティーリャ語において個別に用いられることのない複合語というものもまた存在する。というのも、これらはラテン語において生成され、我々の言語に移行した［残存した］からである。

94. これらの複合語のうち、カスティーリャ語に移行しなかったラテン語の単語が基語として現れ、そこにカスティーリャ語の分離可能複合辞が組み合わさったものがある。たとえば、*conduzca*（導く）や *deduzca*（推論する）がそうで、［カスティーリャ語で］*guío*（導く）を意味するラテン語の単純語である *duco* と、前置詞の *con* や *de* とからなるのである。他には、カスティーリャ語においては独立できない語である「分離不可能複合辞」がカスティーリャ語の単語と複合する例がある。たとえば、動詞 *abstengo*（差し控える）はラテン語の前置詞 *abs* と、カスティーリャ語の動詞 *tengo*（持つ）からなる。一方、カスティーリャ語の単語が、ラテン語においてすでに分離不可能であった小辞と結合する例がある。たとえば、複合動詞 *retengo*（保つ）と *reclamo*（要求する）における *re* がそうである。そして、*introduzco*（入れる）や *seduzco*（誘惑する）のように両要素ともが完全にラテン語のものがある。これらはどちらもラテン語の単純語 *duco* の複合語で、前者は副詞 *intro* と、後者はラテン語とカスティーリャ語のいずれにおいても分離不可能な小辞である *se* と組み合わさっている。

95. 複合辞の形態には以下のようなものがある。例と共に示す[5]。

a［離脱、方向・目的］	*amovible*（取り外し可能な）、*aparecer*[6]（現れる）
ab［離脱］	*abjurar*（宣誓をして信仰を捨てる）
abs［離脱］	*abstraer*（抽象する）
ad［～に対して］	*admiro*（賞賛する）
ante［前に］	*antepongo*（前に置く、優先する）
anti［反対］	*antipapa*（対立教皇）

ben［良く］	*bendigo*（祝福する）
bien［良く］	*bienestar*（福祉）
circum［周囲に］	*circumpolar*（極の周りにある）
circun［周囲に］	*circunvecino*（周囲の）
cis［手前、こちら］	*cisalpino*（アルプス山脈からローマ側の）
citra［手前、こちら］	*citramontano*（山のこちら側の）
co［共に］	*coheredero*（共同相続人）
com［共に、完全に］	*compongo*（組み立てる）
con［共に、完全に］	*contengo*（含む）
contra［相対］	*contradigo*（矛盾する）
de［離脱、～から］	*depongo*（やめる、捨てる）
des［分離、否定］	*desdigo*（そぐわない、反する）
di［離脱、～から］	*dimanar*（湧き出す）
dis［分離、否定］	*disponer*（並べる）
e［外に］	*emisión*（放出）
em［中に］	*emprendo*（着手する）
en［中に］	*ensillo*（鞍を置く）
entre［間に、相互の］	*entreveo*（かいま見る）
equi［等しい］	*equidistante*（等距離の）
es［外に］	*esponer*（さらす、展示する）
ex［外に］	*exponer*（さらす、展示する）
estra［外に］	*estravagante*（常軌を逸した）
extra［外に］	*extravagante*（常軌を逸した）
i［否定］	*ilegítimo*（違法な）
im［否定］	*impío*（不信心な）
in［否定］	*inhumano*（非人間的な）
infra［下に、下部の］	*infraescrito/infrascrito*（下に署名した）
inte［間の、中間の］	*inteligible*（理解可能な）

inter［間の、相互の］	*interpongo*（間に置く、差し挟む）
intro［間の、相互の］	*introducir*（中に入れる）
mal［悪く、正常でなく］	*malqueriente*（悪意を抱く）
o［下に］	*omisión*（省略、言い忘れ）
ob［下に］	*obtengo*（獲得する）
par［～のために］	*pardiez*[7]（おや、まあ）
para［～を止める］	*parasol*（日傘）
per［～を通って］	*permito*（許す）
por［～のために］	*pordiosear*（物乞いをする）
pos［後に、以後に］	*posponer*（後ろに置く、延期する）
post［後に、以後に］	*postliminio*（権利［財産］回復）
pre［前に、以前に］	*precaución*（用心、警戒）
preter［通過、超越］	*preternatural*（超自然的な）
pro［前に、前方に］	*prometer*（約束する）
re［再び、後方に］	*resuelvo*（解決する）
red［再び、後方に］	*redarguyo*（反論する）
retro［後ろに、後方の］	*retrocedo*（後退する）
sa［下に、下方に］	*sahumar*[8]（香を焚く）
satis［十分に］	*satisfacer*（満足させる）
se［分離、離別］	*separar*（分ける）
semi［半分の］	*semicírculo*（半円）
sin［～なしに］	*sinsabor*（無味乾燥）
so［下に、下方に］	*someto*（従わせる）
sobre［上に、上方に］	*sobrepongo*（積み重ねる）
son［下に、下方に］	*sonsaco*（だまし取る）
sor［上に、上方に］	*sorprendo*（驚かせる）
sos［下に、下方に］	*sostengo*（支える）
sota［下位、下級］	*sotaermitaño*（下級隠修士）

soto［下位、下級］	*sotoministro*（幇助修士）
su［下に、下方に］	*supongo*（仮定する）
sub［下に、下方に］	*subdelegado*（代理の代理）
subs［下に、下方に］	*substraer*（盗む、取り去る）
super［超過、超越］	*superfluo*（表面の）
sus［下に、下方に］	*sustraer*（盗む、取り去る）
tra［超えて］	*tramontar*（山越えする）
tran［超えて］	*transubstanciación*[9]（全質変化）
trans［超えて］	*transatlántico*（大西洋横断の）
tras［超えて］	*trasponer*（越える、視界を遮る）
ultra［超越］	*ultramontano*（山の向こうの）
vi［副の、代理の］	*virrey*（副王）
vice［副の、代理の］	*vicepatrono*（主人の代理）
viz［副の、代理の］	*vizconde*（子爵、伯爵の代理）
za［下に、下方に］	*zabullir*[10]（水にさっと浸す）

96. *incompatible*（両立しない）、*predispongo*（仕向ける）、*desapoderado*（猛り狂った）、*desapercibido*（気づかれない）といった語のように、時には二つ、三つもの複合辞が結合する場合もある。

97. これまでに見た複合辞と同様なのが、数を意味する複合辞である。*bicorne*（先が二叉の、2本の角の）における *bi*、*tricolor*（3色）における *tri*、*cuadrúpedo*（4本足）における *cuadru* のようにラテン語由来のものもあれば、*disílabo*（2音節）における *di*、*letra*、*penta*、*hexa*、*decálogo*（十戒）における *deca* のようにギリシア語由来のものもある。[11]

98. ラテン語同様、ギリシア語からも、構成要素のいずれもがカスティーリャ語には存在しないような複合語が、常に取られてきたし今も取られて

いる。このことで避けなければならないことは、いくつかの異なる言語の要素を組み合わせることである。というのも、このような語の複合は、それが慣用によって裏付けされていなければ、無知の証となるからである。仮に、複合に参与する言語のうちの一つがカスティーリャ語であるとき、その複合語はグロテスクな様相を常に呈し、*gatomaquia*（闘ネコ）や *chismografía*（ぼろクズ書き）といった語に見られるように、おどけた文体にしか寄与しない。

第 4 章　名詞：いくつかの種類

99. 名詞とは、61 で見たように、実詞および形容詞である。

100. さらにこれらを、固有名詞と呼称名詞とに分けよう。

固有名詞とは、個別の人や物に対し、それらを同種・同族の他の個体から区別するために付されるものであり、たとえば *Italia*（イタリア）、*Roma*（ローマ）、*Orinoco*[12]（オリノコ）、*Pedro*（ペドロ）、*María*（マリア）のようなものである。

一方、呼称名詞（一般名詞や総称名詞とも呼ばれる）は、ある種や類、属の全ての成員に充てられ、それらが有する性質や特徴を意味する。たとえば、*ciudad*（都市）、*río*（川）、*hombre*（男）、*mujer*（女）、*árbol*（木）、*encina*（樫）、*flor*（花）、*jazmín*（ジャスミン）、*blanco*（白［い］）、*negro*（黒［い］）のように。あらゆる形容名詞は、呼称名詞である。

101. 呼称名詞は、あるものが他を包含するような種を意味する。ゆえに、*pastor*（羊飼い）は *hombre*（人）に含まれ、この *hombre* は *animal*（動物）に、さらに動物は *cuerpo*（物体）に含まれ、そして *cuerpo* は *cosa*（事物）や *ente*（存在物）に含まれる。これら最後の二つの名詞は、存在するものすべて、そして、我々が思い描けることすべてをその意味の中に包含する。この包含する類のことを、包含される類に対して、属（género）と呼ぶ一方、

包含される類は、包含する類に対して、種（especie）と呼ぶ。したがって、*hombre*（人）という語は、*pastor*（羊飼い）、*labrador*（農夫）、*artesano*（職人）、*ciudadano*（市民）やその他多くの語を包含する属であり、逆に、これらの名詞は、*hombre* の種である。

102. 呼称名詞は、頻繁にある特定の個人に対して用いられることによって、時に固有名詞に転換する場合がある。*Virgilio*（ウェルギリウス）、*Cicerón*（キケロ）、*César*（カエサル）は本来呼称名詞であって、特定の家族の全構成員に用いられた苗字であった。そして、同じことが、たとえば、*Calderón*（カルデロン）や *Meléndez*（メレンデス）、その他多くのカスティーリャ語の苗字についても起きている。とはいえ、これらは、家を意味するときには、*Quevedo*（ケベド）や *Alarcón*（アラルコン）のように前置詞 *de* によって前置される。

103. 実詞は現実のものを意味する。現実のものとは、たとえそれらがスフィンクスやフェニックス、ケンタウルスのように寓話や想像上のものであっても、我々がそのように［現実のように］表象できるものである。また、それだけではなく、我々が現実の存在を思い描けない対象を意味することも可能である。なぜなら、たとえば *verdor*（草の緑）、*redondez*（丸さ）、*temor*（恐れ）、*admiración*（感嘆）のように、それらは現実の事物に帰属していると我々がみなす純然たる特質である一方、それらを当の事物からは離脱し独立したものと想定しているからである。この独立性は語においてのみ見られるのであって、我々が、現実のものを意味する *verde*（緑の）や *redondo*（丸い）といった名詞[13]を通して、また、*temo*（恐れる）や *admiro*（感嘆する）といった動詞を通して思い描いたのと同じことを、実詞を通じて思い描くこと以外においては成り立たないのである。我々が、その中に、この純粋に名詞的な虚構の独立性があるのだと想像するような特質は、抽象的な特質と呼ばれ、それはすなわち、分離している特質を意味

する。その一方で、具象的なものがあり、これは、本来的な、包含されているものというようなものである。実詞も同じように、我々がそれらの中に思い描く特質が具象的であるか抽象的であるかにしたがって、具象的であったり抽象的であったりする。たとえば、*casa*（家）や *río*（川）は具象実詞であり、*altura*（高さ）や *fluidez*（流暢さ）は抽象実詞である。ところで、形容詞はこのやり方で分類することはできない。なぜなら、一つの同じ形容詞が具象的なものに適用されたり、抽象的なものに適用されたりするからである。たとえば、*verde* は *monte*（山）、*árbol*（木）、*yerba*（草）を修飾することもあれば、*color*（色）を修飾することもあり、また、*redonda*（丸い）が *figura*（像）を修飾することもある。

104. 抽象実詞は多くの場合、名詞や動詞から派生して作られる。しかし、中には、我々の言語に基礎語（primitivos）を持たない語も存在する。たとえば、ラテン語の名詞 *vir*（男）から派生した *virtud*（徳）がそうである。はじめ、*virtud* という語によって理解されたものは、あたかも *varonilidad*（男らしさ・男性性）と言うがごとく、我々が *fortaleza*（力強さ）と呼ぶものであった。また、抽象実詞から派生した多くの形容詞がある。たとえば、それぞれ *tiempo*（時間）、*espacio*（空間）、*virtud*（美徳）、*gracia*（おかしみ）、*fortuna*（幸運）から派生した *temporal*（時の）、*espacioso*（広大な）、*virtuoso*（高潔な）、*gracioso*（おかしい）、*afortunado*（幸運な）がそうである。

105. 派生してできる実詞のなかでも特筆すべきは集合実詞である。これは、基礎語によって意味される種の個体の集合を意味するものである。たとえば、*arboleda*（木々）、*caserío*（家々）がそうである。しかしながら、*cabildo*（司教座聖堂参事会員）、*congreso*（議会）、*ejército*（軍隊）、*clero*（聖職者）のように、種を意味する実詞から派生していない集合実詞や、*millón*（百万）、*millar*（数千）、*docena*（数十）のように、数のみを意味するものもある。また、*muchedumbre*（大勢）や *número*（数）のように、

純粋に集合を意味するものもあり、それが *gente*（人々）のように、人の集合の場合もある。これらの実詞はそのため不定集合実詞と呼ばれる。

106. 派生した実詞の中でこれもまた指摘しておきたいものとして、*librote*（大きい本・つまらない本）、*gigantón*（大巨人・大男）、*mujerona*（大女）、*mujeronaza*（大女）、*feote*（かなりの醜男）、*feísimo*（きわめて醜い）のように、物理的な大きさや程度の大きさといった概念を包含する増大辞、そして、*palomita*（小鳩）、*florecilla*（小さな花・可憐な花）、*riachuelo*（小川）、*partícula*（粒子）、*sabidillo*（知ったかぶりの）、*bellacuelo*（チンピラ）のように、小ささや少なさを意味する縮小辞というものがある[14]。これらの実詞と、そしていくつかのその他の種類の実詞について、以下で個別に扱うことにする。

第５章　名詞の数

107. 単数は、たとえば《Existe un Dios（一人の神が存在する）》のように、絶対的唯一性を意味する[15]。そして、《El hombre es un ser dotado de razón（人は理性を備えた存在である）》のように、分配的唯一性を意味する。この例において、*el hombre* は「一人一人の人」「あらゆる人」を表している。また、単数は、たとえば《El hombre señorea la tierra（人類はこの大地を治めている）》のように、集合的に種をも意味する。

108. 複数は、分配的にあるいは集合的に多数を意味する。たとえば、《Los animales son seres organizados que viven, sienten y se mueven（動物とは、生命があり、感覚を有し、自ら動く組織化された存在である）》と言うとき、動物の一つ一つが、生命を持ち、感覚を有し、自ら動く組織化された存在であり、意味は分配的である。一方、《Los animales forman una escala inmensa, que principia en el menudísimo animalillo microscópico y termina en el hombre（動物は、顕微鏡的な極めて小さな生物に始まり、人に至る

巨大なスケールを形成する)》と言うとき、一つ一つの動物がその巨大なスケールを形成するのではなく、全体で形成するのであり、したがって、意味は集合的である。

なお、複数形は、後述する規則に従って、単数形から作られる。

109. ［第一規則］単数形が強勢のない母音で終わっている場合、*s* を添加する。すなわち、*alma*（魂）から *almas*、*fuente*（泉）から *fuentes*、*metrópoli*（首都）から *metrópolis*、*libro*（書籍）から *libros*、*tribu*（種族）から *tribus*、*blanco*（白い／男性形）から *blancos*、*blanca*（白い／女性形）から *blancas*、*verde*（緑の）から *verdes* となるように。しかし、他の母音によって先行されている強勢のない語末の *i* は *yes* となる。*ay*（「うわっ」という言葉）から *ayes*、*ley*（法）から *leyes*、*convoy*（護送）から *convoyes* となるように。これは不規則というよりむしろ偶発的な現象である。というのも、これはカスティーリャ語の発音のある特性に由来しているからであって、それはすなわち、二つの母音に挟まれる強勢のない *i* は常に子音となるからである。つまり、*áies*、*léies*、*convóies* と言っていたものが、*ayes*、*leyes*、*convoyes* となったのである。

110. ［第二規則］単数形が強勢のある母音で終わっている場合、*es* を添加する。すなわち、*albalá*（証書）から *albalaes*、*jabalí*（イノシシ）から *jabalíes*、*un sí*（「はい」という返事）および *un no*（「いいえ」という返事）から *los síes* や *los noes* となるように。また、*una letra te*（一つの t の文字）から *dos tees*、*una o*（一つの o の文字）および *una u*（一つの u の文字）から *dos oes* や *dos úes* となる具合である。しかしながら、*mamá*（母）と *papá*（父）の複数形はそれぞれ *mamás* と *papás* となり、また、*pie*（足）は *pies* となる。さらに、2 音節以上の、*é* や *ó* ないし *ú* で終わる語の複数形は、*s* のみを付加することが常であって、*corsé*（コルセット）が *corsés*、*fricandó*（フリカンドー）が *fricandós*、*tisú*（ラメ）が *tisús* となる。一方、

2音節以上の *í* で終わる語については、不規則な複数形が用いられる。たとえば、*bisturís*（外科用メス）や *zaquizamís*（屋根裏部屋）のように[16]。また、*maravedí*（マラベディ通貨）という語には *maravedís* や *maravedíes* ないし *maravedises* という複数形があり、はじめの形が最もよく使われる。さらに、詩人たちは自らに都合が良い場合[17]には、*alelís*（ニオイアラセイトウ[18]）や *rubís*（ルビー）と言いがちであるが、*mamá* や *papá*、*pie* を例外として、*es* を付加して作られる規則的な複数形が常に受け入れられる。

111.［第三規則］子音で終わる語には *es* を添加する。たとえば、*abad*（修道院長）から *abades*、*útil*（便利な）から *útiles*、*holgazán*（怠け者）から *holgazanes*、*flor*（花）から *flores*、*mártir*（殉教者）から *mártires*、*raíz*（根）から *raíces* となるように。なお、*frac*（燕尾服）の複数形 *fraques* は例外ではなく、これはあらゆる屈折語尾においては、原則として、音を表す文字ではなく、音そのものを考慮するからであり、*frac* において *c* の文字があらわしている音[19]を保持するために、この文字を qu- に変える必要があるからである。また、*z* の文字が *c* に変わるのは、純粋に正書法上のことである。

この第三の規則に反するもので頻出する真の例外には、以下のようなものがある。

112.［第一の例外］*lord*（英国貴族）の複数は *lores* となる。

113.［第二の例外］*régimen*（体制）のように、滑音語（後ろから数えて三番目の母音に強勢があるような語）は、一般には複数形を欠いている。しかしながら、*regímenes* と言う人もある[20]。

114.［第三の例外］*el martes*（火曜日）が *los martes* となり、*el paréntesis*（括弧）が *los paréntesis* となるように、*s* で終わる強勢のない語[21]は、単

数形のような複数形を形成する［、つまり単複同形である］。この規則は、*x* で終わる強勢のない語や、最後の母音に強勢のない *z* で終わる姓も従う。たとえば、*el fénix*[22]（不死鳥）や *el señor González*（ゴンサレス氏）が *los señores González*（ゴンサレス夫妻）となるように。

115.［第四の例外］元来の形態を保持している外国語の姓は、複数形でもその形を変えない。*los Canning*（カニング家）や *los Washington*（ワシントン家）のように。ただし、その語尾がカスティーリャ語においてもよく用いられるもので、カスティーリャ語のように発音するものは除く。たとえば、*los Racines*（ラシーヌ家）や *los Newtónes*（ニュートン家）のごとくである[23]。

116. 複数形の構成においては、強勢の位置を変えないのが規則である。だが、*régimen* という語を複数形にする者は *regímenes* と言わざるを得ない。というのも、先に（15）で述べた超滑音語以外のカスティーリャ語の単語においては、語末から数えて三番目（la antepenúltima）よりも前の音節に強勢が来る[24]ことは決してないからである。

117. *fénix* の複数形として *fenices* という形が、韻文において使われたこともあった。また、*carácter* の二種の複数形 *carácteres* と *caracteres* では、後者が優勢となった。ある種の話者は、これを類推によって *cráter* にも広げ、*crateres* という複数形を作る。

複数形の構成の仕方が特別な規則に従ういくつかの複合名詞がある。以下が、最もよく打ち立てられた形態論［上の規則］であろう。

118.［第一の規則］動詞と複数形の実詞からなる複合語において、これらのうちいずれも変化を被っていない場合、その複数形の実詞が動詞に後続

し、単複同形となる。たとえば、*el/los sacabotas*（ブーツを脱ぐための器具）、*el/los mondadientes*（爪楊枝）、*el/los guardapiés*（踵に届く長いワンピース）のように。

119. ［第二の規則］変化を被っていない二つの単数名詞からなる複合語で、そのうちの一つが実詞、もう一つがこれを修飾する形容詞または形容詞化した実詞であるような場合、これの複数形は、そのそれぞれを複数形にすることによって構成する。たとえば、*casaquinta*（町の郊外の庭付き邸宅）は *casasquintas* となり、*ricohombre*（貴族）は *ricoshombres* となる。しかしながら、*padrenuestro*（主の祈り）の複数形は *padrenuestros* であり、*vanagloria*（虚栄）の複数形は *vanaglorias*、*barbacana*（城の銃眼）は *barbacanas*、*montepío*（互助年金）は *montepíos* となる。ただし、*los Montenegros*（モンテネグロ家の人々）や *los Villarreales*（ビリャレアル家の人々）のような苗字はこの規則の例外扱いしなければならない。

120. ［第三の規則］上記以外の複合語については、二つ目の複合要素である名詞の複数形によって語全体の複数形を構成する。これが名詞でない場合には一般の規則に従う。*agridulce*（甘酸っぱい）から *agridulces*、*boquirrubio*（おしゃべりの）から *boquirrubios*、*sobresalto*（仰天）から *sobresaltos*、*traspié*（つまずき）から *traspiés*、*vaivén*（往復）から *vaivenes*[25]となる。*hijodalgo*（郷士）の複数形は *hijosdalgo*、*cualquiera*（誰でも）の複数形は *cualesquiera*、*quienquiera*（誰であっても）は *quienesquiera* となる。

121. 複数を欠いている実詞は多い。これには、たとえば *Antonio*（アントニオ）、*Beatriz*（ベアトリス）、*América*（アメリカ）、*Venezuela*（ベネズエラ）、*Chile*（チリ）といった固有名詞があてはまる。しかし、地方や王国、地域を表す固有名詞は、全域ではなくその各々の部分を意味する場合、複数形となる。したがって、我々は *las Américas*（アメリカ両大陸）、*las Españas*

（スペイン全土の各都市）、*las Andalucías*（アンダルシア全域の各都市）と言うのである。そして、同じことが人物名にも起きるが、それは意味するところが変化し、それらの名前が真に呼称名詞となるときである。我々は、ホメロスやウェルギリウスに比肩し得る偉大な詩人を指して *los Homeros* や *los Virgilios* と言い、放埒な王女たちを指して *las Mesalinas* と言う。*las Venus* と言ってヴィーナスの像を指し、ムリーリョの二、三の絵を指して *dos o tres Murillos* と言うのである。また、皇帝たちを *los Césares* と呼び、ベアトリス（Beatriz）の名を持つ女性たちを *las Beatrices* と呼ぶのである。この世には、複数存在するのが想像できないものはほとんどなく、したがって、我々の想像を表現する場合に限っては、複数形を許容しない実詞はほとんどないのである。

（未了）

参考文献

Cartagena, Nelson（2014）“El aporte de don Andrés Bello a la lingüística y filología modernas”, *Boletín de Filología*, Tomo XLIX/1, pp. 135–148.

山田善郎ほか監修（2015）『スペイン語大辞典』白水社、東京。

拙稿（2007）「アンドレス・ベリョ『カスティーリャ語文法』日本語訳(1)」、*IBERIA* 8、pp. 31–44、神戸市外国語大学大学院イスパニア語学・文学研究会。

注

1）　ここは Edaf 版 59 ページの最下段に当たる箇所であるが、nuestra lengua であるべきところが nuestras lengua というふうに、nuestra が誤って複数形となっているので指摘しておく。

2）　この *enseño* 以降、動詞が直説法現在形の一人称単数形で挙げられているのは、ラテン語の文法書や辞書編纂の伝統に則ったものと考えられる。

3）　この箇所には本書の注釈者 José Rufino Cuervo によっても注が付けられている。lejos/lejas という語が形容詞として用いられる可能性についてであるが、lejas tierras という固定表現は存在するものの、lejos+ 男性名詞という組み合わせは存在せず、Cuervo はこれを luengas tierras からの類推である説を採っている。luengas（luengo）は純然たる形容詞であるからこれで構わないが、これと意味が近い lejos（→ lejas）で代用したところで、こちらは元来副詞で

あるため、文法上の問題がある。

4） これは歴史的には正しいし、女性実詞 *mente* は現在も使用される語であるが、現在では形容詞から副詞を作る際に必要な接尾辞と認識され、この語そのものが母語話者の意識に昇ってくるとは考えにくい。

5） 以下に続く例の中には、語源を知らなければ、接頭辞の表す意味が分かりにくいものもある。

6） *amovible* と *aparecer* の *a-* は語源が異なる。前者はラテン語の *ab-* に由来し「離脱、分離」を意味する一方、後者は *ad-* に由来し「方向、位置、目的」を意味する。この二者の接頭辞および前置詞は語末の子音が脱落したことで *a* として合流した。

7） この語はフランス語の par Dieu（神のために）がスペイン語に借用されたもの。

8） *sa-* は現代スペイン語で生産的な接頭辞ではない。ベリョが挙げている *sahumar*（香を焚く）はラテン語の *suffumar* に由来するが、この語は sub-＋fumar からなり、*sub-* が後続の /f/ に影響を受けて逆行同化したと考えられる。ほかにも、*so-*、*son-*、*sos-*、*su-* などのように、*sub-* の異形態は、多い。注 10 も参照。

9） キリスト教において、聖餐におけるパンとワインが、イエスの肉と血であるとする考え。

10） *zabullir* は *zambullir* とも言うが、「何かをさっと水に浸す」の意。この語は後期ラテン語の *subbullire* に由来するため、*za-* は *sub-* と同一である。

11） 後半の、数を表すギリシア語由来の接頭辞については、*di* と *deca* のみ例が挙げられている。

12） Orinoco はベネズエラを流れる河川の名。

13） 名詞は実詞と形容詞の上位概念であるが、ここでは形容詞を指している。

14） Bello はふれていないが、増大辞と縮小辞の中でも前者は特に軽蔑的な意味が添加されやすい。また、*feo* から *feísimo* を作る語尾変化は通常「絶対最上級」と呼ばれ、増大辞として扱われることは現代ではほとんどないと思われる。

15） この例は Dios を用いているからこのように言えるのであって、可算の具象名詞に不定冠詞を施したものが「絶対的唯一性」を表すとは通常考えられない。むしろ、その名詞が意味する指示対象の種における、任意の一個体を表す。

16） *bisturí* や *zaquizamí* は強勢のある *i* で終わるため、上述の規則で言えば *-es* を付加するはずだが、そうはなっていないので Bello は「不規則」と言っている。

17） 韻を踏む必要性がある場合を指していると思われる。

18）　アブラナ科の植物の名。

19）　/k/ の音。

20）　現代ではこの強勢が規範であり、複数形では強勢の位置が母音一つぶん後ろにずれる。

21）「*s* で終わる強勢のない語」は原文では 'los en s no agudos' だが、正確には、最後の母音に強勢のない、s で終わる語である。単母音の *mes*（月）の複数形は *meses* となる。

22）　原文では複数形が示されていないが、単複同形であるので *los fénix* となる。

23）　語尾の形からだけでは、Washington が複数形にならず、Newton がスペイン語風の複数形になるのを説明できない。また、原文において Newtónes のように -o- に強勢の記号が付加されているが、Newton の発音は［njútɔn］（白水社『スペイン語大辞典』による）であり、強勢は New- の部分にある。

24）　この「語末から数えて三番目（la antepenúltima）よりも前の音節に強勢が来る」語のことを、sobreesdrújulas（「超滑音語」）と呼ぶが、これはスペイン語においては、活用している動詞に目的格の弱勢代名詞が付くことによってしか構成されない。たとえば、*Devuélvemelo*（私にそれを返してください）や *contándomela*（私にそれを語りつつ）などがそうである。

25）　*agridulce*、*boquirrubio* の下線部は形容詞、*sobresalto*、*traspié* の下線部は実詞、*vaivén* の下線部は動詞 *venir* の活用形である。形容詞と実詞の上位概念が名詞であるから、ここでいう規則に該当する。